



特集 メディアが生み出す神々

メディアのなかのカリスマ — 江原啓之とメディア環境

ほりえ のりちか
堀江宗正

「スピリチュアル・カウンセラー」江原啓之のメディアでの活躍には目を見張るものがある。二〇〇六年には三二の雑誌掲載（連載を除く）、二〇〇七年までで約六〇冊の著書、テレビでは週一のレギュラー番組「オーラの泉」、年二回の特番「天国からの手紙」などに出演しており、いずれもゴールデンタイムに全国へ放送されている（江原啓之公式サイト <http://www.chara-hiroyuki.com> による）。これは、従来のいわゆる「霊能者」では考えられない露出量であり、人々における影響力と支持は軽視できない。

この現象を宗教現象として見るかどうかは、「宗教」の定義に左右される。仮に、経験や理性を越えたものに

関する信念や実践を「宗教」と呼ぶなら、江原の発言は「宗教」的内容を持つと見なせる。肉体とは別の靈魂の存在を主張し、輪廻転生を説くからである。しかし、権威づけられた聖典や儀礼や教団を有するものを「宗教」と呼ぶなら、そのいずれをも欠くため「宗教」としては認知されない。実際、これまでのところ、江原を「宗教」的指導者と見なすような言説はほとんど見られない。超越的なもの、ときに「霊」に関わるものを、個人が内面において実感するさまを「宗教」的とせず「スピリチュアル」とするなら、メディアにおける江原関連情報のブームは、スピリチュアルだが「宗教」を形成するには至っていないということになる。

通常の人間には関知しえない霊と接触し、そのメッセージを伝えるとされる人物は、通常ならそのカリスマ的資質ゆえに、多くの信奉者を従えることになる。それが目に見える集団となれば、教祖的存在と目されるようになるであろう。

しかし、江原はメディアで成功すると、個人相談を中止し、依頼者との直接的接触を断つ。メディアを介してのみ、人々にその教えを伝達するという形態をとるに至る。その結果、教団形成や教祖崇拜への回路は塞がれる。しかし、閉鎖的な教団を作るよりもかえって広い範囲の人々にアピールするような存在となった。教祖にならないが、カリスマ的人物として大きな影響力を及ぼすようになった。それはあたかも、マスメディアの一角がヴァーチャルな教団として機能しているかのようでもある。江原啓之が「宗教」集団の形成に至らず、メディアのなかだけでスピリチュアルな思想を説くカリスマ的人物として存在するということは、いかなる条件のもとでも可能になっているのか。これが本稿の問題意識である。具体的には、雑誌、著書、テレビなど、メディア別で江原

思想の現れ方を分析し、メディアが提示の枠組としてどう機能しているか、どのような効果をもたらしているのかを見てゆきたい。

(1) 初期の雑誌掲載——占い特集のなかで

江原啓之公式サイト（前出）の「TV・ラジオ・雑誌」ページを見ると、江原のテレビ出演が本格化するのは二〇〇一年である。雑誌掲載はそれよりも早く、デビューの一九九二年ですでに一二件の掲載がある。オウム事件のあった九五年以後、その数は減少し、九八年から復活して、年間で一〇件前後を推移する。それが二〇〇二年に一気に五四件に増える（連載を含む）。書籍も二〇〇一年から刊行が増え、二〇〇三年以後は年に八冊程度刊行されるようになる。そして、二〇〇五年に「オーラの泉」が始まり、二〇〇七年度にはゴールデン・タイムに進出する。

つまり、単発の雑誌掲載が火付け役となってテレビ出演が始まり、著書刊行につながる雑誌連載が急増し、テレビでゴールデン・タイム進出後、知名度が急上昇とい

う経過をたどっていることが分かる。二〇〇二年以後の雑誌での発言は、著書を読めば大体の傾向はつかめる。そこで、本稿では二〇〇一年までの初期の雑誌掲載がどのようなものであったかを見てゆき、次に著書、そしてテレビへと分析を進めてゆきたい。

初期の雑誌掲載は、マガジンハウス社刊行の女性雑誌「an・an」が群を抜いて多い。一九九二年から二〇〇一年までに二四回掲載されている。そのほとんどが、占い特集での掲載である。

「an・an」は、二〇代から三〇代の未婚女性を読者層とするファッション雑誌である。しかし、純粋なファッションだけでなく、恋愛・性愛、女性の生き方、対人関係、身体・健康などに関する特集を組み、ライフスタイル全般の提案をおこなっている。マニュアル的なものが多く、こうすればいい男が手に入る、人からよく見られる、理想の身体が手に入る、きれいになるなどといった特集タイトルが目立つ。そこそこに努力もするが、なるべく少ない努力で大きな利得を得たいという欲望に応えている。占い特集も、努力を超えた運命や運勢への関心

に応えるものと位置づけられるだろう。

そのなかで、江原は、当初から自分が占い師ではないことを強調している。最初の雑誌掲載では、「背後霊が話すことを伝えるのが霊能者。だから、当てるのではなく、その言葉は真実」というタイトルで紹介され、相談依頼の連絡先なども記されている（「an・an」一九九二年二月一八日号）。ところが、それは占い師の情報を読者に提供するページのなかでの紹介なのである。占いとの違いは、林真理子との対談でさらに明確化されている（一九九四年四月二二日号）。これらを総合するなら、占い師は未来を断言口調で言い当てる、具体的な指示を出し、依頼心を湧かせるが、江原は、霊魂との交信で得た真実を伝え、その人自身が生きる目的を把握して、自分の意思と選択で力強く人生を歩めるようカウンセリングする、ということになる。

このように、個人の努力を超えた運命に従って生きれば幸せになれるという占いの世界観や人生観に対して、霊的なものと結びつきながらも努力してくことをすすめる世界観や人生観、（のちの表現だと）スピリチュアルな